

現会員以外で研究会創立以来多少にかかわらず『原初年代記』の訳注に携わった方々は、故菱山忍、植野修司（京都大学）、天野和男（神戸市外国語大学）、石戸谷重郎（奈良教育大学）、小野理子（神戸大学）、船山仲他（京都工芸繊維大学）の各氏である。ここに名を記してその労を謝したいと思う。

終りに出版を引受けて下さった名古屋大学出版会、及び同会の後藤郁夫氏に厚く御礼申上げる次第である。

なお、本書の刊行には、昭和62年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付をうけた。

山口 巖

「京大教養部報」No. 169 1988年2月15日。

昭和62年度宿泊研修を終えて

昭和62年度宿泊研修は11月7・8日の「浄瑠璃寺その他」によって、さしたる不都合もなく本年度のすべての予定を無事終了した。11回で参加人員は延べ311名、うち教官は延べ34名、学生数は延べ277名（内女子学生は延べ103名）であった。

これを昨年度と比較してみると、昨年は教官数は34名と変わらないが、学生数は延べ282名、うち女子学生が延べ66名であった。従って本年度の参加学生の数は、昨年度に比べて心持ち少ないようにも思えるが、全体としてほぼ同じと考えてよいと思われる。これに対して昨年と著しい違いを見せているのは女子学生の数である。女子学生は昨年度延べ66名に対して本年度は103名と約1.6倍になっている。これが何を意味するかにはわかに断定できないが、少なくとも女子学生も比較的気軽に参加できる雰囲気が醸成されつつあると言うことはできるであろう。これは教官と学生の緊密なコミュニケーションを回復するという一泊研修の目的

の一つに徴して一つの進歩であると評価することが出来よう。

内容的に昨年と異なるのは、第3回の「犬山、京大霊長類研究所、明治村、リトルワールド」が一泊二日から二泊三日に変更になったことである。これは学生に日頃接することの少ない研究所の教官の方々から、もう少し余裕を持ってきてほしいという要望があったことを直接の動機として試みたものであるが、結果はきわめて成功したといい得るものであった。この成功は引率の教官のかたがたの御努力もさることながら、現地でレクチャーと案内をしてくださった研究所の教官各位のご厚志の賜である。勿論これは他の施設についても言えることであり、この場をかりて厚く御礼申し上げる次第である。

さて、感想文などによって全体を通してみれば、いくつかの特徴が浮かび上がってくる。

その第一としてさまざまな分野の学生と知合いになり、会話を通じて自己のこれまでのあり方を反省し、今後の生き方を考えるきっかけを得ることができた、というように視野が広がったという感想がある。

第二に教官と話し合う機会を得てその人間性にふれ、啓発されたと言う場合がある。とくに教官の若いときの話などはいろいろな意味で若い学生に強い印象を与えたようである。

第三に新しいものの観方の獲得がある。例えば「友達と看板や解説板の短い一面的な解説を見ながら見て回ったときには無味乾燥な広場や石、岩、瓦などにしか見えなかったものが、実は非常に多くのことを物語っているということが分かりました。」とか、「これからは京都のお寺なんかも今までとは少し違った目でみるようになるかも知れません」というような感想にそれがよく現れている。

第四に研究というものに対する観方の変化がある。たとえば「京大のキャンパスを遠く離れて研究に携わっている人々の後ろ姿を見ると、この人たちが京大を支えているんだなあと思った」という感想がこれにあたる。

このような認識はたとえば「このような大学で勉強できることはすばらしいことであると改めて認識した」とか、芦生にいて「林学科の学生となれたことを改めて嬉しく思うようになった」というように、自己の選択に対する強い確信に

人を導くことにもなる。

以上のように宿泊研修旅行は、これに参加した多感な学生達のものの考え方、ものの観方に強いインパクトを与えるものであるということができよう。これはある学生の「考えねばならないことがたくさん出てきました」という言葉に集約されているように思われる。

委員会でも議論になり、また参加学生の感想にも現れている問題点として、いわゆる常連の問題がある。即ち何回も研修旅行に参加する学生の存在が、他の人たちの参加を妨げているのではないかということである。これについては、確かに「とてもついてゆけない」という感想もあったが、この種のものは意外に少数であった。しかしこのことから直ちに彼らの参加が全く問題にならないということにはならない。「常連の方々がそれなりに率先してくれ、場の盛り上げなどによりかなり尽くして下さったと思いましたが、逆にその人達だけでことが運ばれそうなこともあって、微妙でした」というように、常連の効用を認めつつ、一方で若干問題がある、というのが大方の感想であるように見受けられる。元より常連の存在すること自体この企画が魅力的なものであることを証するものにほかならないのであるから、新しい参加者を得るように努力しつつ、具体的に折り合いをつけているようにするのが、実際的ではないかと考えている。

以上を総合すれば結論はおのずから明らかであろう。この企画が今後益々発展することを祈る次第である。

昭和62年度宿泊研修実行委員長

やまぐち いわお ロシア語